

パキスタンの雑誌事情（特集 アジア地域研究と雑誌 -- 「コア・ジャーナル」を語る）

| | |
|-----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 著者 | 山根 聡 |
| 権利 | Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp |
| 雑誌名 | アジ研ワールド・トレンド |
| 巻 | 198 |
| ページ | 35-37 |
| 発行年 | 2012-03 |
| 出版者 | 日本貿易振興機構アジア経済研究所 |
| URL | http://hdl.handle.net/2344/00004041 |

パキスタンの雑誌事情

山根 聡

●独立前から続く雑誌文化の伝統

パキスタンの雑誌は、英語とウルドゥー語による刊行物がほとんどである。パンジャービー語、スィンディー語、パシュトー語による刊行物も皆無ではないが、定期刊行物は多くない。

この雑誌文化は、パキスタン独立の半世紀前、二〇世紀に入ってから活発化した。一八四九年、英領期にラーホールがパンジャーブ州都に設定されると、英語やウルドゥー語で多くの新聞が刊行され、一九世紀末には、デリーの新聞の種類が六〇あったのに対し、ラーホールでは二〇〇種類の新聞が刊行され、ラーホールが北インドでのウルドゥー語メディアの中心地となった。二〇世紀に入ると、文芸誌『宝庫 *Makizan*』（一九〇一年）、児童向け週刊誌『花 *Phul*』

（一九〇九年）や女性向け週刊誌『女性文化 *Tahdhib al-Niswan*』（一九〇九年）が刊行されるなど、雑誌文化が開花した。『花』は一九六〇年代まで刊行が続いた。同誌に投稿していた若き作家たちは、のちに現代ウルドゥー文学界を牽引する作家に成長した。

一九四七年のパキスタン独立後、政府刊行物は首都カラチーから刊行されたため、政治や経済の雑誌は現在もカラチーから刊行されているものが多い。これに対し、文学や評論など文化関連の雑誌は、カラチーと共に、ラーホールからの刊行が続いている。また、一九六〇年代に首都がイスラーマバードになると、政府関連の研究施設が同市に設立され、紀要もこの新しい首都から刊行されるようになった。現在イスラーマバードにある、政治に関する

研究機関の多くは対ソ連戦争時代に設立された。パキスタンの戦略的重要性が増し研究機関設立や成果刊行費用が西側諸国からの支援で潤沢にあつたことが背景にあつたと推測される。

ここでは、パキスタンの雑誌事情について、政府刊行物や紀要、一般雑誌等に分けて概観する。

●一般雑誌

パキスタンの内政や外交を知るうえで入手しやすい一般英字誌は、『ニューズライン *Newsline*』と『ヘラルド *Herald*』であろう。いずれも月刊で、カラチーから発刊され、内政、外交、経済、文化などさまざまな分野を扱う。また『*Friday Times*』は週刊新聞で、ラーホールから刊行されているが、主に社会問題等を扱う良質の新聞として知られる。同紙のウル

ドゥー語版『この頃 *Ajkal*』も知識層に広く読まれている。

経済では、カラチーから一九八二年に刊行された週刊誌『*Pakistan & Gulf Economist*』が良質の雑誌として評価されている。

軍事関連の雑誌としては、一九八五年以来、カラチーから刊行されている月刊英字誌『*Defence Journal*』 (<http://www.defence-journal.com/>) があつて、カラチーから刊行されるウルドゥー語週刊誌『世界の新聞 *Akbar-e-Jahan*』は一九六七年ごろに発刊され、現在も圧倒的な人気を誇る。読者欄、政治、国際情勢、特集、スポーツ、連載小説、読み切り小説、新刊案内、占い、夢占い、星占いのほか、結婚式や新生児の投稿写真などあらゆる要素を含み、最近では在日パキスタン人のエッセイも掲載されている。

●政府刊行物等

年鑑ものとして、*Pakistan Year Book* がカラチーから刊行されている。近年では類書も見られるが、パキスタンの全般的な情報を得るうえで、まずは手元に置いておきたいものである。『*The All-Pakistan Legal Decisions*』一九四

九年来刊行されている月刊の法令集である。

国語問題では、国立国語アカデミー Mugtadira Qaumi Zabān から、月刊誌『ウルドゥー新聞 Akhbar-e Urdu』が刊行され、ウルドゥー語の専門用語の造語法や、世界各地でのウルドゥー語教育の実態、あるいは書評などが掲載されており、パキスタン国内での言語問題について詳細な情報を得ることができる。パキスタン文学アカデミーは不定期で『文学研究 Adabiyat』を刊行している。

●紀要等

パキスタンでは、二〇〇〇年代前半のムシャッラフ政権下、高等教育委員会 Higher Education Commission の指導のもと、高等教育機関に関する改革がなされた。その際、紀要については、厳密な査読制度を採用することなどが刊行費支援の条件となった。編集委員会や査読者には外国人研究者の参加が奨励されている。査読の厳格さには雑誌・紀要によって差があることは否めないが、研究活動の成果公開に一定の基準を確立したことは評価できる。

政治関係の紀要としては、一九

九九年ごろ設立されたイスラマバード政策研究所 (Islamabad Policy Research Institute : IPRI) が最も精力的な活動を行っており、年二回発行の雑誌 *IPRI Journal*、国際関係に関連した特集である *IPRI Paper*、そして様々なトピックを選んで論集とした月刊誌 *IPRI Facfile* を刊行させている。内容は内政、外交、国際関係、経済など充実している。『UN Peace-keeping Operations and Pakistan』(二〇〇六年一月号)、『Pakistan's War on Terror』(二〇〇六年二月号)、『South Asian Free Trade Area』(二〇〇六年六月号)、『Pak-Afghan Relations 2005-07』(二〇〇七年二月号)、『Pakistan-India Peace Process』(二〇〇七年三月号)、『Pakistan-Russia Relations』(二〇〇七年六月号)、『Inflation』(二〇〇八年六月号) などがある。特集号としては、セミナー等の報告や選挙結果をまとめたものなどがある。二〇一一年冬号で一四〇号を刊行しており、これらは <http://ipripak.org/facfiles.shtml> で見ることが出来る。

政策研究所 (Institute of Policy Studies) が隔月刊する『*Policy Perspectives*』もまた、論集のほか、

特色あるテーマでの雑誌を刊行している (<http://www.ips.org.pk/>)。同研究所は対ソ連戦争が始まった一九七九年に設立された。『アフガンスタン特集』(二〇〇八年五月号) など、内政、外交、国際関係、宗教問題等についての論考を扱っている。同じくイスラマバードにある戦略研究所 (Institute of Strategic Studies <http://www.issi.org.pk/>) は、季刊誌『*Strategic Studies*』を刊行している。地域研究研究所 Institute of Regional Studies は一九八二年の創立以来、季刊誌『*Regional Studies*』を刊行し、特に南アジア、中央アジア、中国、中東などパキスタンの周辺地域に関する論考を中心に扱う。月刊誌『*Spotlight*』は、特集号として刊行されている。パキスタン地域のメディアが扱った記事を扱う隔週の『*Selections from Regional Press*』、特集を組む年刊『*Focus on Regional Issues*』、地域情勢に関する論文を集めた『*Regional Perspective (Spotlight on Regional Affairs)*』など、各種の雑誌を刊行するほか、*Monograph Series* も不定期で刊行している。

ラーホールのパンジャブ大学 University of the Punjab から年二

回刊行されている『*Journal of the Research Society of Pakistan*』同大学の Centre for South Asian Studies から一九八四年来、年二回刊行されている『*South Asian Studies*』もまた、パキスタン政治研究では欠かせない。同センターは、月刊誌『*South Asian Minority Affairs*』も刊行している。

学術誌では、Pakistan Historical Society が一九五三年から刊行している『*Journal of the Pakistan Historical Society*』がある。

経済関係では、パキスタン唯一の開発経済学会 Pakistan Society of Development Economics が発行する季刊誌『*Pakistan Development Review*』や、Lahore School of Economics が年二回発行する『*The Lahore Journal of Economics*』がある。パンジャブ大学の経済学部は季刊誌『*Pakistan Economic and Social Review*』を刊行する。

また、University of Karachi の School of Social Science が発行する『*Journal of Social Sciences and Humanities*』が、不定期ながら研究成果を刊行し続けている。また、同大学の Applied Economics Research Centre は、一九八二年から年二回刊行『*Pakistan Journal of*

Applied Economics』を出している。National Bank of Pakistan の Economic Research Wing が隔月刊の『*Economic Bulletin*』をカーラーチーから刊行している。State Bank of Pakistan は、ウルドゥー語で逐次報告書を刊行している(『*Pakistani Mu 'aishat ki Kaifiyat* パキスタン経済の特徴』)。これは、State Bank of Pakistan の External Relations Department (Publications Division) に発注している。

●文芸誌など

文学関係では、『*絵Nugush*』、『軽妙な文学 *Adab-e-Latif*』、『新月 *Māhe-Nau*』などの文芸誌がある。文芸誌の歴史は古く、『軽妙な文学』はパキスタン独立前の一九三五年に創刊された月刊誌で、現在も不定期ながら続いている。パンジャーブ大学オリエンタル・カレッジから刊行される『*Oriental College Magazine*』はパキスタンの国語ウルドゥー語の文学を中心にアラビア語、ペルシア語、パンジャービー語などの諸言語およびその文学に関する碩学の研究論文を刊行してきた。ウルドゥー文学研究科は『*こだまBāzighi*』を年二回刊行している。パキスタン最

古の研究機関ガヴァメント・カレッジ大学 Government College University は『ラーヴィー川 *Ravi*』を刊行している。イスラマバードの国立現代語大学 National University of Modern Languages はウルドゥー語の研究雑誌『調査研究 *Daryafat*』および『研究の文学 *Tahqiqi Adab*』を刊行、同じくイスラマバードにある国際イスラーム大学も紀要『水準 *Majar*』を刊行している。カーラーチー大学からは、ウルドゥー語の紀要『紀要 *Arifa*』が刊行されている。スィンド州ハイダラーバードに隣接するジャームシヨローにあるスィンド大学ウルドゥー文学研究科は、不定期ながら『*Tahqiq*』を刊行している。同州ハイルプールのシャー・アブドゥルラティーフ大学 Shah Abdul Latif University は紀要『ダイヤモンド *Ainās*』を刊行している。

●政党関連

パキスタンの政党の機関誌にはパキスタン人民党とイスラーム党のものがある。人民党はウルドゥー語誌『不屈の精神 *Ishtiqat*』を、イスラーム党はウルドゥー語誌『クルアーンの解釈者

Tarjuman al-Qur'an』を刊行している。後者に掲載される論文は、パキスタンにおけるイスラーム主義者の主張を理解するうえで重要である。編集長は一九八〇年代のズィアーウル・ハク政権時代に入閣を果たした経済学者、フルシード・アフマド氏である。

●雑誌講読での留意点

一九八〇年代のズィアー政権下では、イスラーム化政策のもと反イスラーム的なメディアに対する弾圧があり、政府に批判的なメディアが反イスラーム的であると指摘される場合もあった。

現在パキスタンでは、イスラームに対する冒涇や、政府による一時的な取締まりを除いては、比較的自由な発言が可能となっている。ただし、パキスタンの場合、政権が交代すると政府系機関のトップなどが政権党支持者に代わる場合があり、雑誌の内容も現政権や政党を支持する内容になる場合がある。最近の人文系の政府機関の刊行物は、故ブットー首相一族を賛美する記事が多く掲載されている。それぞれの時代を反映する点では興味深いし、首相一族についての資料を集めるうえではあ

りがたいが、内容に中立性を欠ける点は常に注意しておきたいところである。

●パキスタンの英語

余談だが、九・一一以降、欧米への渡航が困難となった中東の若者が、英語を学ぶためにインド、特にプネーに留学している実態を調べたことがある。近年、中東やアフリカの学生のみならず、東南アジアやネパールなどアジア各地から、比較的安価な学費と生活費で高い英語力を習得できるインドは、留学先として人気を集めている。つまり、インドが植民地時代の遺産である英語運用能力を、学生を集めるツールに利用しているのだ。それほどに南アジア地域では英語が浸透しており、新聞や雑誌等のメディアで用いられる英語は「しっかりとしている」。そのことは、パキスタンの場合でも同様である。パキスタンの英字新聞、雑誌などの英語もまた、インド同様しっかりとしたものとして定評がある。同国の治安が安定すれば、中東など海外からの留学生を集めることになるだろう。(やまね そう／大阪大学 世界言語研究センター 教授)